

# 近代小説の読み方 (2)

芥川龍之介 『羅生門』／『舞踏会』／『齒車』……(佐藤泰正)

泉 鏡花 『高野聖』／『歌行燈』／『眉かくしの霊』……(笠原伸夫)

国木田独步 『武蔵野』／『春の鳥』／『竹の木戸』……(滝藤満義)

島崎藤村 『破戒』／『家』／『夜明け前』……(十川信介)

太宰 治 『晩年』／『津軽』／『斜陽』……(渡部芳紀)

夏目漱石 『吾輩は猫である』／『門』／『明暗』……(桶谷秀昭)

V 有斐閣新書

# 代小説の読み方(2)

好行雄編



有斐閣新書

近代小説の読み方(2)

1979年9月20日 初版第1刷印刷  
1979年9月30日 初版第1刷発行©

編 者 三 好 行 雄

発 行 者 江 草 忠 允

発行所 株式 有 斐 閣  
会社

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-17  
電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370  
京都支店 [E06] 京京区田中門前町 44

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

理想社印刷・和田製本

★定価はカバーに表示してあります

## 序に代えて

小説を肩肘張って読まねばならぬ固苦しい読書対象とは思っていない読者も多いにちがいない。たとえば隣人とつきあうように、好きな小説の主人公と気楽につきあっておけばそれでよい、という考えかたも確かにありうる。そこに〈読み方〉などを求めるのは、文学の教師だとか研究者だとかに自己限定した人間の思い入れにすぎないというふうな声もすぐ聞こえてきうるである。

しかし、消閑の具として、寝転がって活字を追うだけの気楽な読みかたのなかでさえ、読者は好きな隣人と嫌いな隣人とおのずと選択する。その好きか嫌いかの次元から、ある種の出会いに似た読書体験との距離はじつはさほど遠くないのではないか。わたし自身の経験でいえば——これはすでに別なところで書いたことだが——わたしにとって、おとなの文学との最初の出会いは中学二年の秋、肋膜炎を病んで休学した回復期のつれづれに、父の書棚から引きだした改造社版『現代日本文学全集』の一冊、『芥川龍之介集』がそれであった。小説のおもしろさをはじめて教えられたわけだが、なにがどうおもしろかったのか、いまはもう記憶もあやふやである。ただ、ひとつだけ鮮明なのは『河童』の読後感で、九州に育って河太郎の民譚を聞

き馴れていたせいかもしれないが、架空の小動物に託した痛烈な戯画は、少年の空想癖に適度な刺激を与えて奇妙な感銘をのこした。

もちろん、このときのわたしに確かな出会いの手ごたえがあったわけではないし、まして、『河童』のにがい本質が見えていたはずがない。雌の河童や子どもの河童にからみつかれて、息もたえだえに歩いている雄河童にしても——夫であり父である男のカリカチュアを、首筋にかじりついている子河童のひとりにすぎない中学二年生に理解しろというほうが無理である。所詮は稚い読みかたにすぎぬといってしまうえばそれまでだし、読み手の成長とともに作品の相がおのずと変貌するということのも事実である。読み手に応じてさまざまな貌をもつところに、傑作の傑作たるゆえんがある。

わたしにとっても、芥川龍之介との最初の触れあいは、小説のおもしろさについてのかすかな発見だけを遺して、この作家はわたしのなかを素通りしていった。にもかかわらず、その後自然科学の徒をころざした迂路を経て、文学研究の一端にとりついた人間として、あらためて芥川龍之介をあらたな研究対象として据えなおしたとき、そのわたしなりの芥川理解が少年期の経験とまったく無縁だったとはいいきれないような気がする。どこがどうかかわっているかという、因果の脈絡を的確に辿るのは不可能だが、あるいはいまの読みかたの根幹を決定するような龍之介の貌を、稚い理解を通して無意識に見てしまっていたのではないかとも思う。

現在のわたしが芥川龍之介について抱くイメージ、すくなくともその発端は少年期のささやかな読書体験のなかにあった、という考えかたを否定する根拠はどこにもないのである。過去を現在につなぐ（無意識<sup>レミニツサンス</sup>の記憶）とは、そういうものであろう。

だから、どうだというわけではないが、小説をどう読むかという問いがつねに、他者の（生）とどう出会うかという問いをふくむことだけは確かである。小説はすべての読者にとって、みずからと同時代の、またみずからの生きなかつた時代の状況と生の証言であり、歴史を織りつづけたさまざまな（風景）の記録にはかならない。そして、あらゆる傑作はその背後に、書くという行為に賭けた作家の生と死の総体を隠している。

出合いが発見であることはいうまでもないが、それは主体から対象への一方的なかかわりかたではなく、対象から主体への逆照射でもある。比喻としていえば、主体が対象によって発見されることもある。読者が小説を選ぶように、小説もまた読者を選ぶ。小説を読むという行為における真の出会いは、作品が自分にだけ語りかける声を確実に聞きとることにほかならない。そのことにかかわって、小説をどう読むかは問われねばならぬ。

もちろん、〈小説の読み方〉に普遍的な公式が期待されない以上、ひとは小説をどう読むべきかについて語ることはできない。かれはただ、自分はどう読むか、どう読んだかについて語

りうるだけである。それはいうまでもなく、自分にだけ見える作品の貌、自分にだけ聞こえる作品の声について、そして、それを見るための、また聞くための手続きについて語ることである。そのことによって、作品の感動は真に普遍化され、共有される。——本書もまたそうした意図のもとに、すぐれた文学的個性の語る〈近代小説の読み方〉を提示したのである。

本書では、第(1)巻に幸田露伴・志賀直哉・谷崎潤一郎・樋口一葉・三島由紀夫・森鷗外、第(2)巻に芥川龍之介・泉鏡花・国木田独步・島崎藤村・太宰治・夏目漱石の二人の作家が収められている。それぞれの作家について、作家活動の画期をなした作品の主題や方法を分析し、そこに彷彿する作家の生の諸相をさぐるなど、具体的な〈読み〉の手続きを通じて、それぞれの作家が遺した文学世界の総体とその現代にかかわる意味を明らかにすることをめざした。

ここに選んだ一二人の作家がいずれも、日本の近代文学を語るときに避けて通れぬ存在であることはいうまでもない。日本の近代文学を代表する作家がこれに尽きるというわけではないが、すくなくとも、近代文学史を貫流するさまざまな傾向は網羅しえたと思う。

明治の青春から現代にいたるまで、日本の近代作家はおのこの時代の〈風景〉のなかで、表現上のさまざまな試行をくりかえしながら多彩な作品を生みだしてきた。それは一言にしていえば、理念としての〈西洋〉と、風土の伝統とわがちがたく結びついた〈日本語〉との格闘

の歴史であつた。西洋の文学理論の受容をいそいで〈近代〉ににじりよりつつ、そのあわただしすぎた強制が知識人の内部にめざめさせた反西洋の感覚Ⅱ〈反近代〉との葛藤と分裂の過程といいかえてもよい。その二極を包括してどのような史的体系を完成するか。露伴や鏡花といった作家たちの位置づけをふくめて、それが目下問われている新しい文学史像の内実である。すべては既成の眼鏡から自由な〈読み〉から出発すべきであろう。その意味で、本書では所収作家を通常の文学史の時間に添って整序することをあえて避けた。読者と作家とがまず手ぶらで対面する、そのための文学への道をも意図したからである。

最後に、編者の意図を了とせられ、すぐれた労作を寄せられた執筆者各位に謝意を表する。

昭和五四年七月二七日

三好 行雄



---

### 編者紹介

三 好 行 雄 (みよし ゆきお)  
東京大学文学部教授

### 執筆者紹介 (五十音順)

桶 谷 秀 昭 (おけたに ひであき)  
文芸評論家・東洋大学文学部教授

笠 原 伸 夫 (かさはら のぶお)  
日本大学文理学部助教授・文芸評論家

佐 藤 泰 正 (さとう やすまさ)  
梅光女学院大学文学部教授

滝 藤 満 義 (たきとう みつよし)  
横浜国立大学教育学部助教授

十 川 信 介 (とがわ しんすけ)  
学習院大学文学部教授

渡 部 芳 紀 (わたべ よしのり)  
中央大学文学部助教授

---

## 凡例

- ① 引用原文のテキストは各執筆者の判断によっています。
- ② 引用原文が歴史的仮名遣いの場合、仮名遣いはもとのまま（ふり仮名を同様です）、漢字は新字体によっています。

本書に収録の写真は日本近代文学館提供。

目次



序に代えて

三好行雄

1 芥川龍之介

佐藤泰正

〈 1 〉

〈創作と主張〉をめぐる矛盾／「消された眼」の問題——美と倫理の交錯

I 主題と文体 3

II 『羅生門』 9

『羅生門』の世界／主題と伝記的背景をめぐって／  
『羅生門』から『鼻』へ／『芋粥』——その一面

III 『舞踏会』 22

〈生のやうな花火〉の語るもの／末尾の改稿をめぐって

IV 『歯車』 27

不安の背後に潜むもの／二つの〈赤光〉／亀裂を語ることの意味

V 芥川の遺したもの 33

「最後の一句」をめぐって／初心への回帰

## 2 泉鏡花

笠原伸夫

〈37〉

I 幻想と風俗の狭間 39

鏡花の世界／鏡花の登場／幻想と風俗

II 『高野聖』 45

語りの形式／入れ子型の構成／水のモチーフ

III 『歌行燈』 52

桑名の夜景／通過する場所／〈影〉

IV 『眉かくしの霊』 58

幽霊のいる場所／語りの技術／幽霊の鮮明な形象

V 美とエロスの機能 65

伝統と土俗／美と反抗

### 3 国木田独歩

滝藤 満義

〈73〉

I 独歩の生涯とその文学 75

独歩における文学者の位置／独歩の文学活動の三区分

II 『武蔵野』 82

『武蔵野』の成立と構造／『武蔵野』の評価と問題点

III 『春の鳥』 89

事実と仮構／『春の鳥』の評価と問題点

IV 『竹の木戸』 96

自然主義文壇と『竹の木戸』／『竹の木戸』の世界

V 存在感の文学 102

独歩文学の家郷『武蔵野』／『春の鳥』評価に対する疑問／  
『竹の木戸』の位置

# 4 島崎藤村

十川 信介

(111)

## I 藤村文学の特質

113

藤村のモチーフ／内と外

## II 『破戒』

119

『破戒』論の対立点／二つの『破戒』／丑松の曖昧な戦い

## III 『家』

128

作中の世界と実生活／『家』の三つの意味／まぼろしの『家』

## IV 『夜明け前』

137

さだまらぬ評価／主題の提示——一筋の街道／『交通』の勢い／

小説の『非劇的』性格と『大きな自然』  
おのづから

## V 『夜明け前』が残した問題

146

## 5 太 宰 治

渡部 芳紀

〈151〉

### I 人と作品 153

作家活動／純粹な理想主義者——前期の太宰／  
戦時下の太宰——中期の安定と開花／期待と絶望——戦後文壇の旗手

### II 『晩 年』 159

第一創作集の位置と構造／『道化の華』に流れるもの

### III 『津 軽』 167

故郷への回帰／自己確認としての旅／  
巧みな自己表白——真の客観小説

### IV 『斜 陽』 174

戦後社会の象徴『斜陽』／作品の構造

### V 〈心の王者〉 180

〈弱さの文学〉への疑問／〈心の王者〉・精神の貴族・愛／

# 6 夏目漱石

反俗の精神・価値の転倒／後世への展望

桶谷 秀昭

<189>

I 作家以前 191

感性のありか／作家へ

II 『吾輩は猫である』 199

『猫』の笑い／漱石と明治の日本

III 『門』 205

幸福の感触／自然の意志

IV 『明 暗』 212

愛の理想家お延の造型／愛の実際家お秀の造型／

津田の属性／書かれざる部分

V 作家の死 221

『明暗』論と漱石像／文人漱石として



# 1 芥川龍之介

佐藤 泰正



芥川龍之介（明治25～昭和2）。  
昭和2年6月の表情。7月，自  
殺した。

自ら描いた「水虎晩歸之図」。

